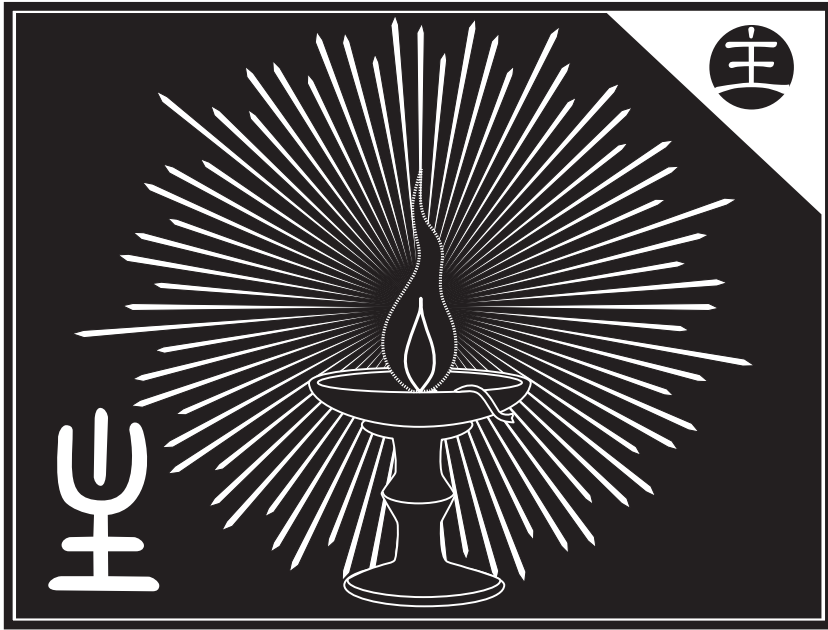


白川静のことば

《44》



金子都美絵・画

主はのちに主人、家長を意味するが、本来は火主（炎）の形である。もとは焰の中心部だけを書いた。主はそれに灯火台の形をそえた字で、戦国期の中山王墓から出た十五連蓋燭のちゆうざんのように、主柱に多くの連枝をつけ、明りを強めたものがある。その受け皿のあるものを灯という。もと燈とうとし、登声の語であった。客を迎えるときには、主人が自ら灯火を執るのが礼とされた。祭祀のとき、長老たる叟が火を執るのと同じである。

家の主柱となるものを柱という。住も主を声符とする字であるが、駐と同じように「とどまる」という意があるのである。

（中略）

人と灯火と住とは、文明的には必然の連関をもっている。先はもと、日月によって恵まれたものであった。灯火によってその光を支配することで、人はこの世の主人となった。そして今は、宇宙にまでその居住権を主張しようとしている。このさき、一体どのような文明史が展開されようとしているのであろうか。このテーマの延長線上に、そのような問題が秘められているのではないかと思う。